

幸いな人とは

詩編 1:1～6

2024/10/16 松並徹治

1:1 幸いなことよ悪しき者のはかりごとに歩まず罪人の道に立たず嘲る者の座に着かない人。

1:2 【主】のおしえを喜びとし昼も夜もそのおしえを口ずさむ人。

1:3 その人は流れのほとりに植えられた木。時が来ると実を結びその葉は枯れずそのなすことはすべて栄える。

1:4 悪しき者はそうではない。まさしく風が吹き飛ばす秕殻だ。

1:5 それゆえ悪しき者はさばきに罪人は正しい者の集いに立ち得ない。

1:6 まことに正しい者の道は【主】が知っておられ悪しき者の道は滅び去る。

人にとって何が幸いでしょうか。経済的に恵まれることでしょうか、健康で日々を暮らすことでしょうか、または家族がもたらしてくれるものなののでしょうか。それならば、これらのものが取り去られたら、人は幸いを感じることができなくなるのでしょうか。また、人の幸いとは、置かれている環境や、状況によって変わるものなののでしょうか。そこで、今日は聖書が教える幸いについて、共に学んでみたいと思います。

最初に三人の人が書かれています。「悪しき者」「罪人」「嘲る者」です。

悪しき者についてイザヤ書では次のように書かれています。

26：10 悪しき者は、恵みを受けても義を学びません。公正の地にあっても不正を行い、【主】のご威光を見ようとしません。

悪しき者とは、神から学ばない者であり、神を畏れないに者であります。また、罪人とは、神から離れ、的外れな生き方をしている者のことです。また、嘲る者とは、神など必要ないと考える人のことで、おごり高ぶる者のことです。ですから、この三者は同じような意味だと思われます。そして、「歩まず」「立たず」「着かない」という言葉は、行動を表しています。つまり、生き方を表しているのです。このような生き方をしない人が幸いであるということです。

2節には、「主の教え」とありますが、それは神のことば、みことばのことだと思えます。そして、「昼も夜も」とは一日中ということであり、換言すれば、いつでも、どんな時にでも、ということです。また、口ずさむとは聖書の脚注に「思いを巡らす」と

あります。ですから、神の言葉を喜んで絶えず心に思い巡らしている人ということになります。パウロはロマ書 10:8 で「みことばは、あなたの近くにあり、あなたの口にあり、あなたの心にある。」と言っています。では、その人はどのような結末を迎えるのでしょうか。

3節を見ますと。幸いな人とは、流れのほとりに植えられた木に譬えられています。その木は実を結び、栄えると書かれています。この実とはガラテヤ 5:22～23 にあります御霊の実のことです。「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」また、実を結ぶためには時間を要するのです。それは葉が枯れるような出来があるということです。それは、日照りや干ばつのことであり、換言すれば、試練や困難、悲しみや、苦しみを指しています。そのような時を経て、やがて実を結ぶことができるのです。しかし、自分の力では実を結ぶことはできません。イエス様につながることで、ヨハネ

15:4 を見ますと。「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」

そして、実を結んだ人は栄えるのです。この「栄える」とは今だけのことでなく、未来においてでもです。栄光の体に変えられ、天の御国で永遠の時を過ごすのです。ですから、イエス様にとどまり、試練や困難に耐え実を結ばせていただきましょう。

4節を見ますと、悪しき者つまり、神を畏れない者は穀殻のようだと言われています。

穀殻とは実がないことを言い表しています。ですから、風に吹き飛ばされてしまうのです。マタイの福音書 7:19 には、「良い実を結ばない木はみな切り倒されて、火に投げ込まれます。」と書かれています。

5節～6節を見ますと。悪しき者はさばきを受け、その行き着く先は滅びであるということです。ですから正しい者の集まりに入ることができないのです。

黙示録の 21:27 には次のように書かれています。「しかし、すべての汚れたもの、また忌まわしいことや偽りを行う者は、決して都に入れない。入ることができるのは、子羊のいのちの書に記されている者たちだけである。」

子羊のいのちの書に記載されている者とは、イエス様の十字架の血潮で洗われ罪赦された者のことです。ですから正しい者とは、神に罪を赦され義とされた者のことであ

り、神を愛する者ですから神に知られています。(Ⅰコリント 8:3) しかし、罪ある者はいのちの書から消し去られるのです。(出エジプト 32:33)

マルコ 8:36 を読みます「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら、何の益があるでしょうか。」

全世界を手に入れるとは、この世にあるすべてのものを自分の物とすることです。しかし、自分の目の欲するものすべてを手に入れたソロモンは、すべては、空の空だと言うのです。つまり自分の欲望すべてを叶えられたとしても、虚しいのです。

ですから、幸いな人とは、自分の欲望を満たされる人のことではなく、神により頼み、みことばをいつも喜んで、思い巡らし、実を結ぶ人のことであり、罪赦されて永遠の命に預かる人のことであると言えます。

最後に黙示録 22:1～3 を読んで終わりたいと思います。

22:1 御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、

22:2 都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。22:3 もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、

22:4 御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。